

私はなぜ東北大学を

希望したか

八田 吉典

皆さんにはそれ／＼東北大学工学部を志望した理由乃至は動機があることゝ思うが、私の場合はどうであつたかをお話ししてみよう。

私は父の勤めの関係で中学を終るまでは朝鮮の京城の近くに住んでいた。私が京城中学に入つた頃は京城にも日本で四番目のラジオ放送局JODKが開局されており、続いてFK(広島)GK(熊本)HK(仙台)IR(札幌)等の十キロワット局が開局されラジオの普及率が急激に上昇していた時代であり、ちよつとしたラジオブームであつた。「子供の科学」や「無線と実験」を愛読して科学少年をもつて自認していた私が父にねだつてラジオづくりを始めたのは小学校五年の頃であつたろうか。中学一年頃の私の愛機はUX201A単球再生式受信器で電源はバッテリーを用いていた。その液の補充や充電はなか／＼

やつかいなものであつたがそれが又楽しみでとにかく夢中であつた。当時の言葉でいうとラジオファンであつたのである。

何分トリタン陰極を用いる三極管の単球セツトのことであるから感度はよいはずはないが、アンテナが大きかった為か夜間は仙台でも札幌でも明瞭に入つて来て充分楽しむことができた。或夜、例によつてレシーバを頭につけてダイヤルを廻していると仙台放送局から東北大学電気工学科の宇田新太郎助教授の「飛島・本土間の超短波通信の実験について」という題（題名は正確に記憶してないがこんな意味の演題であつた）の講演が聞こえてきた。先生のこのお仕事は我国電気通信史上に非常に有名な業績で、或いは皆さんもご存じと思うが。

この講演は私にとつて極めて印象的なものであつた。先生は非常に話がお上手だが、このときなか／＼の名調子で、特に終りの方で文化にめぐまれない離れ島の人たちがはじめて本土と無線電話による連絡ができたことを素朴に喜び合う有難さを話されたときは私はすっかり感激してしまった。そして科学研究が非常に尊いものであるということを理くつぬきに感じとつて、そのとき以来自分も是非

東北大学の電気工学科に入って宇田先生の教えをうけたいと深く期したものであった。

その後中学四年になったとき胸をわずらって長らく休学、一時は進学が不可能のような状態になったので、私の東北大学熱もかなりさめてしまったが、全快するとともに昔の希望がよみがえってきて、昭和十六年にやっと思いを達し、その後とう／＼長い間、本学に居すわってしまふようになった次第である。

このようなことを振返ってみると私は今日いうところのマスコミの影響を多分に受けた一人であつて、青少年時代のちよつとした機会の感激がその人の一生を大きく支配するところがあるということをもつて体験している次第である。所で今日のマスコミの刺激は当時などとは比較にならぬ強烈なものでありテレビ、ラジオ、街頭放送等のコマーシャル放送は、これでもか／＼と言わんばかりに我々の周囲をとりまき、お互に競争してその刺激は日一日と強くなりつゝある。

そして人類はそれに順応するためにだん／＼その感覚が麻痺しつゝあるように思える。このような雰囲気の中にあつて青少年にほんとうに純粋な意味でのよい刺激を与えるにはどのようなしたらよいのであろうか。

宗教の伝道をやっておられるような方は恐らくこのような悩みを持っておられると思うので一度お話をうかがってみたいものと思っている次第である。

（電子工学科教授）